

「気になる子ども」のいる保育に関する研究 ～帝京こども教育研究会発表事例の考察～

溝口 綾子

帝京短期大学こども教育学科

A study on childcare that there is “children to be worried about”
～ Consideration of Teikyo child institute of education published case ～

Ayako Mizoguchi

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

Summary

Kindergarten teacher of teikyo group have leaned understanding of the actual situation “children to be worried about” in the nursery. We was captured by the three perspectives of “stumbling psychological”, “stumbling social” and “stumbling physical” these. It was found to have problems with each other negotiations with many other companies a lot of stumbling “children to be worried about”.

It is necessary to encourage experience of the relationship with other children is established through play and life of classroom group for this. Use of behavioral checklist of Hongo(2010) can be clue in addressing specific issues of developmental child becomes clear. Childcare of “children to be worried about” is not a childcare only for “children to be worried about” it must be a proper childcare also for other children.

< keywords > Children to be worried about, Action feature, Assistance of caregivers.

要約

帝京グループ4園の幼稚園教諭は、帝京こども教育研究会における各幼稚園の事例発表を通して、保育の中で「気になる子ども」の実態把握と理解の重要性について学んだ。全教員への保育実践において「気になる子どもとは」の質問紙調査の結果、「心理的つまずき」「社会的つまずき」「身体的つまずき」の3つの視点で捉えていることが確認された。これらのことから「気になる子ども」のつまずきの多くは、他者との相互交渉に問題を抱えていることが明らかになった。そこで、留意すべきこととして、学級集団の遊びや生活を通して他児との関係性が成立する経験を促していく必要があると考える。

保育の中で「気になる子ども」についての研究者、本郷（2010）の行動チェックリストの活用は、子どもの発達上の問題点が明確になり、保育実践の中で具体的な対応の手掛かりとなりうると考える。

幼稚園における「気になる子ども」の保育は、「気になる子ども」のためだけの保育ではなく、ほかの子どもにとっても適切な保育でなくてはならないと考える。

<キーワード> 気になる子ども 行動特徴 保育者の援助

1. はじめに

幼稚園や保育所など保育の場において、以前から「気になる子ども」への対応に思い悩む保育者が多いということを実感している。様々な特徴をもつ、いわゆる「気になる子ども」に対する保育者のかかわりについて、多くの問題が指摘され、研究の対象とされている。本郷（2010）は「気になる子ども」の行動

チェックリストを作成しその理解と対応をまとめている。¹⁾ そのほかの研究者においても「気になる子ども」に関する行動観察や保育者の働きかけなどについて多くの報告がある。本研究では、研究同人である帝京グループ4つの幼稚園の保育者が「気になる子ども」として挙げた事例について本郷の行動チェックリストを使用し、先行研究の検証と発達上の問題点を探る。また、この「気になる子ども」の個別的行動や現

象を取り上げ、保育者からみて「気になる子ども」の何が気になるのか、「気になる子ども」を保育者としてどのようにとらえる視点が大切なのかその契機や背景を検討する。さらに、それらはどのような変容をしていったのかを捉え、保育者はその変容のためにどのような手立てを行ったのかを分析的に解明したいと考える。

2. 研究の目的

(1) 「気になる子ども」は、園生活の中でどのような行動現象を示すかを明らかにする。

(2) 行動特徴の傾向と変容の様態を明らかにする。

(3) 保育者が行動特徴と捉えた「つまずき」や「困難点」にどのように対応したかを考察し、変容をもたらす手立てや働きかけなどの方法を講じることの有効性を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 4つの幼稚園の全保育者に、「気になる子ども」をどのようにとらえているかの質問紙調査をする。

(2) 4つの幼稚園の発表事例を基に、対象児の行動特徴を時系列に記録しまとめ、行動チェックリスト(本郷)を使用し、数値化する。

(3) 本研究会の発表事例の記録から、対象児の行動特徴の変容と保育者の対応や働きかけを考察する。

4. 結果と考察

(1) 保育の中で「気になる子ども」

本学の帝京こども教育研究会は、年三回予定している。本論はその第一回目の内容を取り上げ考察したものである。本研究会に参加した現職の幼稚園教諭52名へ「保育実践の中で気になる子どもとはどのような子どもですか」という質問紙調査を行った。その結果を「心理的つまずき」「社会的つまずき」「身体的つまずき」の3つのカテゴリーでまとめると<表1>のようになる。

数値の高いものは、「心理的つまずき」では『泣いている子ども(36%)』『自分を表現できない(25%)』となっている。「社会的つまずき」では『常に大人のいない場に不安(32%)』、「身体的つまずき」では『病気にかかりやすい(27%)』となっている。

これらの数値は、いずれのカテゴリーにおいても全教員の1/3～1/4の割合を示している。そのうち「身体的つまずき」は、入園前の家庭での過ごし方が大きく影響していると考えられる。例えば、保護者の中に

<表1> 気になる子ども

回答者数52名(複数回答可)

現象	子どもの様態	頻度数
心理的つまずき	・泣いている子ども(すぐ泣く・なかなか泣きやまない)	19(36%)
	・自分を表現できない(笑わない・言葉が出ない)	13(25%)
	・目を見て話を聞くことができない	4(7%)
	・話していることがわからない(すぐ手が出る・脈絡のないことをいう・何度も質問する)	3(6%)
	・すぐにあきらめる(失敗を恐れる・できないと怒る)	3(6%)
	・褒め言葉を求める	1(2%)
	・不安だとおもらしをする	1(2%)
社会的つまずき	・小さなウソをつく	1(2%)
	・常に大人のいない場に不安(登園を渋る・常に保育者に触れている)	17(32%)
	・話を聞こうとしない(自分勝手に話しだす・わめく・キレル)	9(17%)
	・集団の輪に入れない(行動が遅れても気にならない)	6(10%)
	・落ち着きがない(じっとしていない・集合時に歩き回る)	5(9%)
	・叱られていることがわからない(何度も繰り返す・思い通りにする)	5(9%)
	・ものの始末ができない(持ち物の始末ができない・片づけられない)	4(7%)
	・自分の気持ちを相手に押し付ける	1(2%)
・忘れっぽい	1(2%)	
身体的つまずき	・病気にかかりやすい(体が弱い・体力がない・欠席しがち)	14(27%)
	・すぐに疲れる(立ってられない・お腹が痛くなる)	6(10%)
	・すぐに転ぶ(ジャンプできない。つまずく)	6(10%)
	・運動的活動を避ける(階段を登れない・バランスがとれない)	3(6%)
	・食に関心がない(食べたがらない・食べたものをはきやすい)	3(6%)
	・外遊びをしない(体を動かすことが苦手)	2(4%)

2012.7.14調査

は戸外で遊ばせると危険なので、できるだけ家庭内で過ごすようにしていた、あるいは公園の遊具は安全面で不安だから遊ばせない、など戸外での運動的な遊びは、ほとんど見られない状態である。

「心理的つまずき」と「社会的つまずき」は、幼稚園生活の経験の浅い年少児を担当している保育者の回答が多い。つまり、園生活という初めての環境へのかかわりが不安や甘えという姿となって表れていると捉えていることが推察される。例えば、トイレや水道が家庭とは違うなどの施設への対応が困難であることや、保育者を独占できない、あるいは集団で行動しなければならぬ場面があるなどである。

各幼稚園は、研究会では対象児について2事例ずつ発表を行った。本論ではA幼稚園の発表事例の2例（B児・C児）に焦点を当てて考察する。

（2）B児の実態把握

B児（3歳4か月 男児）の3歳入園当初の“気になる”行動特徴の主因子として以下の5項目を示している。

- ・集団に慣れにくく集まりや学級活動（歌、リズム表現、など）に参加しながらない
- ・集合時になると保育室を飛び出すことが多い
- ・1対1で話しても目が合わない
- ・全体で集まってみる紙芝居や絵本は注視することができない
- ・基本的な生活習慣において排泄は自立していない（トレーニング中）。持ち物の始末は保育者の声掛け必要である。

B児の事例を月ごとに振り返ると、以下のような姿が見られた。

4月の姿は、「窓やドアの開閉を繰り返す」「保育室を飛び出す」などの行動が頻繁に見られるため、サブの保育者をつける。一方、好きな遊びはプラレールであり、金魚や亀に興味を示すなど一人遊びがほとんどである。A幼稚園の教育課程では、入園当初の3歳児学年の発達の過程を「保育者や園のものや場所に慣れ親しんで園生活が一人ひとりの生活リズムに組み込まれていく時期」とおさえ、学年全体の子どもについて「園生活に安定する」ことをこの時期のねらいとしている²⁾。保育者はこのねらいを達成するためには、自分の好きな遊びを見つけて取り組むこと、すなわち、一人遊びも必要な経験であるとしている。

5月の姿は、園生活への慣れとともに表情も明るくなり、保育室を飛び出しても保育者が来ることを予測して振り返るようになる。動物介在体験では「へび」に抵抗なく触れることやお弁当は極めて偏食であることは、他児には見られないB児の特徴的な姿である。食育については家庭と連携しながら進めている。

6月の姿は、絵本、CDの「はらぺこあおむし」が好きで繰り返し見たり、集団での学級活動に参加したりすることもある。しかし、学級全体で見る紙芝居や絵本へは興味、関心を示さない。言語理解は単語や2語文であり、集合場面での保育者の全体指示、例えば降園の支度の順序を伝えても受け止めることができない。こうした場面ではサブの保育者が一つずつゆっくりと言葉を補い伝えている。

7月の姿は、依然として一人遊びが多いが、そばに

他児がいても嫌がることはない。また、お気に入りの場所でプラレールなど好きな遊びをしていると落ち着いている様子が見られる。自分の要求は、「おしっこ（したい）」「はらぺこあおむし（が見たい）」と言葉が出るようになってきている。この場面で保育者は、B児が発した単語のみではなく「おしっこしたいのね」など、文章で言い直すようにしている。

このような対応については発達支援センターと連携を取りながら定期的に行っている検討会での話し合いでは次のような対応法を再確認する。

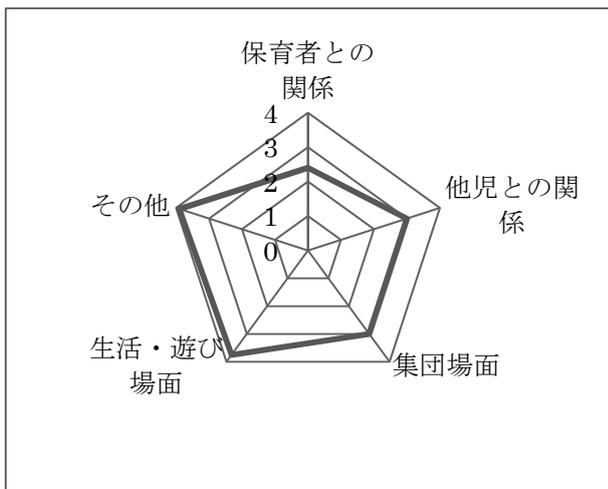
- ・言葉での伝え方は簡単な言葉ではっきりと言う。
- ・視覚遊び（電車、線路など）の他に興味を持って取り組める遊びが必要と目標を定め、集中を妨げないよう見守る配慮をする。
- ・保育室を飛び出す際には、その後ろを保育者が追いかけるためその行動を予測し期待するようになったと考えられるので、安全面に配慮しながら多少の距離をおいて見守るようにする。
- ・学級での集合場面では、B児の好きな視覚的教材を用いることで集合への意識づけをする。

本研究会後、本郷（2010）の「気になる子ども」の行動チェックリスト（D-4様式）³⁾を使用し、B児、C児の事例について実態把握を行った。この行動チェックリストは、A幼稚園のB児とC児の担任保育者に依頼したものである。このチェックリストは、保育者の主観でチェックするような構成になっているが、保育者自身が自分の「気になる」側面を整理して自分自身の保育を見直すことによって保育を改善していこうとするものである。

この行動チェックリストは、「保育者との関係」「他児との関係」「集団場面」「生活、遊び場面」「その他の様子」で見られる姿を各12項目に分別され、全60項目で「保育者がどの程度気になるのか」を5段階評価するようになってきている。行動チェックリスト5領域のうち、30項目は、気になる子どもの行動特徴として「対人トラブル」「落ち着きのなさ」「順応性の低さ」「ルール違反」「衝動性」の5つの因子に分類されられている。領域別得点は「どのような場面、状況」が気になっているのかを示し、因子別得点は「どのような問題」で気になっているのかを示す。

B児の場合、領域別得点の「どのような場面、状況」が気になっているのかでは「保育者との関係で見られる様子～2.4点」「他児との関係で見られる様子～3点」「集団場面で見られる様子～3点」「生活遊び場面で見られる様子～3.75点」「その他の様子で見ら

れる様子～3.9点」という<図1>のような結果である。



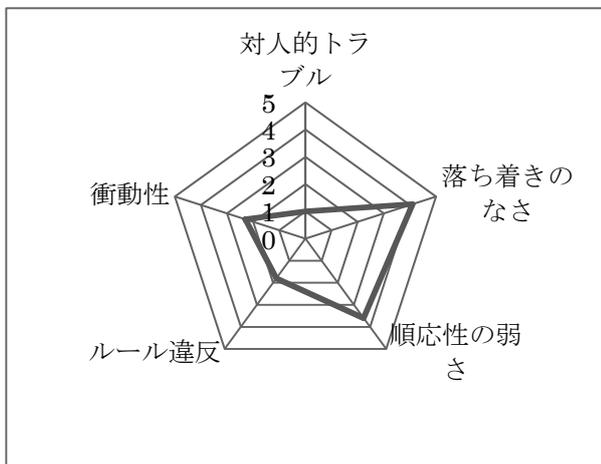
<図1> B児の領域別得点

領域別得点の「生活・遊び場面で見られる様子」「その他の様子」で数値が高い理由としては、学級活動や集団場面の少ない年少児であり、ひとり遊びが多いことが考えられる。

B児の場合、因子別得点の「どのような問題」で気になっているのかは<図2>に示すとおりである。

5段階評価で「落ち着きのなさ～4.1点」「順応性の弱さ～3.6点」と年齢の低い場合に顕著に見られるとする数値が高い。「対人トラブル～1点」「ルール違反～1.8点」と、年齢が高くなると顕著になるとされる数値は低い。「衝動性～2.3点」は中間点数が出る。

領域別得点及び因子別得点の双方の結果から、年齢とともに目立つ特徴が変化することが予想できる。入園して4か月のB児の行動特徴として捉えられた「落ち着きのなさ」の要因としては認知の遅れが考えられる。たとえば、学級の集合場面での保育者の全体指示の言葉が理解できないことや学級活動へ関心を示さず



<図2> B児の因子別得点

に動き回るなどである。これらの行動特徴の要因を考慮した働きかけとして、サブの保育者を付けて担任保育者の言葉を補って理解を促したり、興味ある遊びを認めながらも学級活動に関心を向けられるように視覚的教材を用意するなどである。次に数値の高い「順応性の弱さ」の要因として4の(2)で述べている「保育者が追ってくることを予測する」という行動特徴は、「注目要求」をもっていることが考えられる。そのたびに追いかけてもかえってその行動を促進してしまうことになると判断してやや距離をおいて見守るといった対応をしている。

(3) C児の実態把握

C児(4歳6か月 女児)の4歳児学年進級当初の“気になる”行動特徴の主因子として以下の6項目を示している。

- 基本的な生活習慣(排泄、着脱、持ち物の始末、片付け)は自立していない部分が多い
- 学級活動や集合時には、場を離れたり保育者を注視できないなど、落ち着かない
- 言葉の発達については、歌の歌詞を覚えたり絵本の読み聞かせの際にはオウム返しに言葉を発したりするが、人との会話は成り立たない
- 自分の好きな遊びには集中して取り組んでいる(歌、リズム表現、製作や描画)
- 自分が面白いと感じたことは、やっていけないことでも繰り返しやる
- 自分から友だちへのかかわりはないが、相手からの誘いには応じるようになっている。

C児の姿を3歳児学年入園時から4歳児学年までの1年間を振り返ると、おおよそ次のような姿である。

入園当初から渋谷区発達支援センターに週1回通所している。

3歳児学年入園当初の姿は、幼稚園のトイレは行こうとしないため、保育者が一緒に行ったり、“おまけのおまけの汽車ぽっぽ”をうたいながら促すとしようとする。持ち物の始末は自分からやろうとしないため、わかりやすい言葉で抑揚をつけて伝えて促す。

5月になり学級活動が始まると部屋を飛び出すことが多くなる。自分から保育者や友だちに言葉を発することは少ないが、機嫌のいい時は大きな声で言葉を発したり好きな歌を口ずさんでいる。2学期ころから周りの友だちがお世話をするようになる。本人も嫌がらずに受け止めている。

C児は4歳児学年に進級すると次第に学級の中で落

ち着いて過ごす状態が多くなっている。A幼稚園の教育課程では、4歳児学年当初の発達の過程を「園生活のやり方をつかみ、自分の好きな遊びを選んで取り組む時期」とおさえている。この時期の学年のねらいは「安定して好きな遊びに取り組む」²⁾である。C児のこの時期の姿は、新しい担任や保育室へ戸惑いを見せていたため、サブの保育者をつけることで安心感を持てるようにしている。このような中で、持ち物の始末は絵カードを示すと手順ややり方を理解し進んで行ったり、朝の着替えでは、裏返しになることが多いが自分でやろうとしたりなど少しずつ自立がみられるようになっていく。

5月の姿は、園庭の植物に興味を示し水やりを進んで行う。水やりを始めるようになると朝の支度もスムーズになる。学級全体で場所を移動する際に先頭にするので物事に意欲的になる。これらの援助は、C児にとって励みや心地よさとなっているのであろう。

6月の姿は、友だちと手をつないでトイレに行くようになる。まだ裏表が逆になるが一人で着替えができるようになる。友だちの真似をするようになり、友だちと違うことを嫌う姿が見られる。また、不安なことがあるとそっと友だちのそばに行き手をつないだり顔をじっと見つめわからないことをアピールする。

7月の姿は、前年度から好んでいる歌うことやリズム活動は積極的にしている。また、新たな遊びとしてのりやハサミを使う製作を好んでするようになり、自分で必要なものを選んで使っている。集団で行う活動（体操、歌、ゲーム、など）に自分から参加するようになっている。反面、その日の気分により興味や関心のありかが移り、生活面のこと（着替え、片付け、排泄、食事、など）や遊びへの取り組みに意欲を持ってない姿も見られる。

入園から一年間、発達支援センターと連携を取りながら指導を進めてきたが、4歳児学年でも引き続き同体制で指導を行っている。5月下旬の検討会では、発達支援センターの先生から次のような意見が出された。

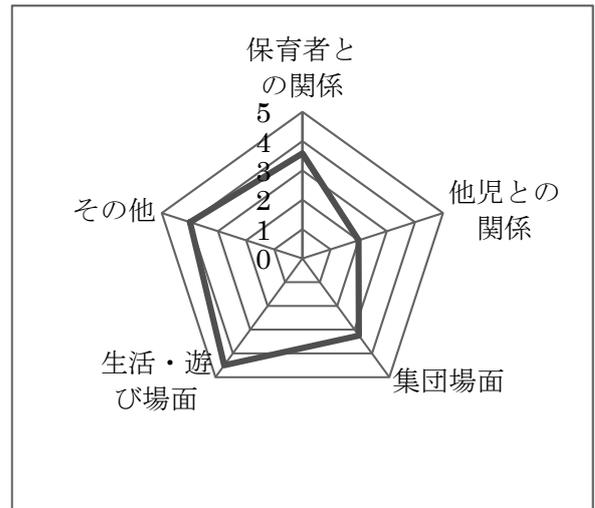
- ・昨年から今年にかけて全体的に大きな成長がみられる。特に、生活面の自立に向かう姿は大きな変容といえよう。
- ・センターに来ると、幼稚園での様子を嬉しそうに話す。園生活の楽しさを実感しているのだろう。
- ・幼稚園でC児の居場所を作ってくれていることが大きい。それが安心感につながっている。

これらの意見について担任保育者は、日常的にC児

を学級の一員であるという意識づけとともに、他児とは異なるC児への配慮を行っている。こうしたことがC児の行動の変容となって表れていると考える。

C児についてもB児と同様に本郷の「気になる子ども」の行動チェックリストを用いてC児の実態把握を行う。

C児の場合、領域別得点では「どのような場面、状況」が気になっているかは<図3>に示すとおりである。



<図3> C児の領域別得点

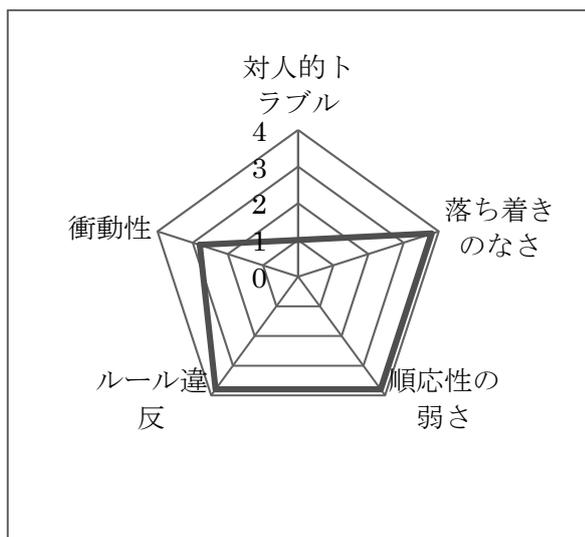
「保育者との関係でみられる様子3.58点」「他児との関係でみられる様子2点」「集団場面でみられる様子3.25点」「生活、遊び場面でみられる様子4.5点」「その他の様子4.0点」となっている。

領域別得点の「他児との関係でみられる様子～2点」以外は高い数値を示しているのは、入園して1年という園生活で様々な保育経験で、4の(3)で述べているように学級集団での遊びや活動でC児が安心感を持てるようにサブの保育者を付けるほか、学級の子どもたちがC児も学級の一員であるという意識を持てるように言葉をかけたりモデルを示したりなどの担任保育者の働きかけが改善のきっかけになっていると考える。

次に因子別得点で「どのような問題」で気になっているかは<図4>に示すとおりである。

「落ち着きのなさ～3.8点」「順応性の低さ～3.8点」「ルール違反～3.8点」と平均よりやや高い数値を示している。「対人トラブル～1点」「衝動性～2.8点」と低い数値を示している。これは年齢とともに顕著になる姿と考えられているが、C児の場合はC児自身の変化というより、領域別得点「他児との関係でみられる様子」で示されているように、5月の姿にある

「周りの友だちが世話をするようになる」という周りの子どもの成長と関係していると考えられる。



＜図4＞C児の因子別得点

5. まとめと今後の課題

帝京こども教育研究会の保育者間においては、事例の発表や議論を通してこれまで漠然と捉えていた“気になる”子どもについて共通理解が深まり、子どもの実態把握に基づいたきめ細やかな対応の重要性を新たに示した。

“気になる”子どもの行動現象については＜表1＞に示すように、「心理的つまずき」「社会的つまずき」「身体的つまずき」の3つの視点を持って捉え、分析することにより、“気になる”子どもの「つまずき」の多くは、他者との相互交渉に問題を抱えていることが明らかになった。これについては、学級集団での生活や遊びを通して他児との関係性が成立する経験を促していく必要がある。

本郷の行動チェックリストの活用は、子どもの発達上の問題点が明確になり、具体的な対応の手がかりとなりうると考える。対象児のB児とC児の行動特徴の傾向と変容は、前項の領域別得点や因子別得点で示すように、その数値は対象児の年齢や行動の要因、背景により、差異となって表れている。これはB児（在園4か月）、C児（在園1年4か月）の幼稚園での保育経験による違いでもあり、学級集団という環境、すなわち、場所やもの、友だちや保育者とのかわりによる変容といえるであろう。

行動チェックリストを使用した2人の担任保育者は、日常保育の中で“気になる”子どもを学級集団から抜き出し特別に保育を進めるのではなく、学級集団の保育の中で対象児への理解を深め、援助について特

別な配慮を行っていく保育実践を大切にしている。また、2人の保育者にとって入園、進級当初に保育の中で“気になる”子どもと捉えた対象児のB児、C児の行動特徴は、本郷のチェックリストを使用することでその実態把握と変容をもたらす指導の方向性を明確にした。

本郷（2008）は、“気になる”子どもの保育の第一歩は“気になる”子どもを理解することである。そのためには、いわゆる発達アセスメントが重要であるという³⁾。そのためには、対象児の特徴や周囲の環境（人・もの・場所）を基盤に指導計画を立案して保育実践することが重要と考える。A幼稚園の場合、保育は学年運営で行っているため、各学年で週案を立案している。その中で、「特に配慮を要する幼児」の欄に“気になる子ども”の状態を書き込み、全員で検討し具体的な指導の方向性を導き出している。

“気になる”子どもの保育は、“気になる”子どものためだけの保育ではなく、ほかの子どもにとっても適切な保育でなくてはならないと考える。

今後は子どもの行動特徴に焦点を当てるだけでなく、子どもを取り巻く人的、物的環境にも着眼し、これらのつまずきを解消していく手立てを導き出すことが必要である。その方法として心理的援助では、その子どもを受容し、気持ちに寄り添い心理的支えとなることや、具体的援助では、遊びや生活場面での具体的な対応、保護者への助言などの対応策やその有効性を確認しながらその方法を確立していく必要がある。

＜本論文は、平成24年10月に日本教材学会においての口頭発表論文を加筆、修正したものである。＞

＜参考文献・引用文献＞

- 1) 本郷一夫著～「気になる」子どもの保育と保護者支援（2010年）建帛社
- 2) A幼稚園平成24年度教育課程
- 3) 本郷一夫著～「気になる」子どもの行動チェックリスト（2010年）建帛社
- 4) 本郷一夫著～「気になる」子どもの保育と保護者支援（2010年）建帛社
- 5) 本郷一夫著～保育の場における「気になる」子ども理解と対応～特別支援教育への接続（2006年）おうふう
- 6) 阿部明子・中田カヨ子編著「保育における援助の方法」（2010年）萌文書林
- 7) 文部科学省～幼稚園教育要領解説（2008年）フレーベル館
- 8) 堅田昭義・生川義雄・梅谷忠勇編著～特別支援児の心理学～理解と支援（2006年）北大路書房